

プロローグ

「前衛はいいぞ」

それがエドモンズ家の家訓であった。

現にローラの両親は、冒険者だった頃^{ころ}、ともに前衛だったという。

父、ブルーノは剣士。

母、ドーラは槍^{やり}使い。

二人でコンビを組み、巨大なドラゴンを倒し、ダンジョンを探索し、新種の生物を発見したりしていった。

第一線こそ退いたが、今でも町の付近に現れるモンスターを退治しており、その腕は微塵^{みじん}も鈍^{にぶつ}つていなかった。

「魔法なんて軟弱者が使う技だ。俺たち前衛の後ろに隠れてこそこそ戦う卑怯者だ」

ブルーノの考え方は非常に偏つていて、まともな冒険者が聞いたら憤慨するようなものである。

だが、ブルーノとドーラは本当に魔法使いをパーティに加えず、前衛だけで数々の偉業を成し遂げたのだ。

今でも語り継がれる、Aランク冒険者の夫婦。

その輝かしい実績を前にしては、誰もが押し黙るしかない。

ブルーノほどではないが、ドーラも似たような思想を持つていた。

ゆえに、娘であるローラを魔法使いにするつもりなど二人にはなかつた。全くもつて思いもよらなかつた。

そして「前衛はいいぞ」と囁かれて育つたローラもまた、自分は父のような剣士になるのだと決めていた。

冒険者ギルドに登録して、槍使いや斧使いと一緒にモンスターを狩つて生活するのだと。

何の疑いもなく信じていた。

しかし。ローラには一つ、誰にも教えていない秘密があつた。

少しも練習していないのに、なぜか魔法が使えるのだ。

それを知つたのは、ほんの出来心からだつた。

三歳の頃、絵本を見て魔法に興味を持ち、軽い気持ちで念じてしまつたのだ。

炎よ出ろ——と。

すると本当に手の平からポンと火の玉が出てしまつた。

ローラは父と母が魔法を忌み嫌つていると知つていた。魔法とは邪悪なものなのだ。

そんな忌むべきものを遊びとはいえ使つてしまつた。

ローラは怖くなり、布団に潜り込んで涙を流した。

以来、魔法など使わず、剣を教えようとする父ブルーノに従つて、ひたすら稽古に励んだ。
ローラ自身、剣が好きだつた。

日々上達していくのが自分でも分かつた。

そして我が子の才能に一番喜んだのは、やはりブルーノであつた。

だが八歳になつてから、また魔法を使つてしまつた。

怪我をした猫を庭で見つけ、つい回復魔法で治してしまつたのだ。

見つかつたら父と母に嫌われると思いつつ、猫を見捨てることができなかつた。

それにも、なぜ自分に魔法の才能があるのだろうか。

魔法のことはよく知らないが、練習していないのに火の玉を出せたり、怪我を治せたりするのは、おかしいのではないか。

いや、どうでもいい。

もう魔法は使わない。

私は剣に生きるのだ。

そう改めて決意を固め、ローラは九歳となる。

「ローラ。そもそも冒険者学園の試験を受けてみるか？ あそこの戦士学科はいいところだぞ。大賢者が学長というのが唯一の欠点だが……それ以外は素晴らしいんだ！ 普通は十五歳くらいで受けるものだけど、お前は剣の天才だ。余裕で合格するだろう。それだけの実力があるなら、早く世に出るべきだ。こんな田舎でくすぶつていたら駄目だ」

九歳の娘に『田舎でくすぶつていたら駄目』と説教する親も親だが、それを聞いたローラは素直に頷いたのだ。

早く一人前の冒険者になりたい。剣でモンスターと戦いたい。

父が認めてくれたのだ。ならば試験は合格するに違いない。

「私はまだ早いと思うんだけど……」

母ドーラはそう言っていたが、しかし娘の才能は否定しなかった。

本人がやる気になっているなら、無理に止める理由もない。

結局のところ、ドーラも根っからの冒険者だった。

そしてローラは九歳の誕生日を迎えた冬。父と母とともに馬車に乗り、王都までやつて來た。

そこで冒険者学園の試験を受ける。

剣士志望であるから、試験官相手に試合形式で剣の腕を見せた。

試験官は在校生だ。

本来なら善戦してみせるだけで合格なのに、ローラは試験官に勝ってしまった。

また頭も悪くないので、筆記試験も余裕でパスした。

「凄いぞローラ。お前は本当に、お父さんの自慢の娘だ」

「お母さんも鼻が高いわ。春からローラは寮住まいね。ローラがいなくなるのは寂しいけど……確かにあなたの才能を親のわがままで埋もれさせることはできないわ。頑張るのよ」

両親に褒められて、ローラは心底嬉しかった。



試験官に勝てたのも嬉しかつた。

自分が今までやつてきた特訓は確実に実を結んでいる。

どこまでも強くなりたい。

「いつか、お父さんとお母さんより強くなつてみせるんだから！」

「おお、言つたなこいつ！」

「ふふ、楽しみにしてるわよ」

そして一度、故郷の町まで帰り、冬の間は今まで通りの生活を送つた。

雪が解け始めた頃、馬車に乗つて再び王都に向かつた。

今度は一人だつた。

順調に行けば三年間。ローラは冒険者学園で、戦闘技術を学び、卒業すると同時にCランクの冒険者になる。

だが、学園側から落ちこぼれのレッテルを貼^はられる^はと、容赦なく退学になり、卒業を待たずして家に帰ることになる。

無論、ローラは退学の心配などしていなかつた。

自分は強い。剣の才能がある。努力もしている。

小さくなつっていく故郷を見つめながら、「学園」の剣士になつてみせる」と、馬車の中で決意した。
「それから、友達が沢山できたらいいなあ……」

このときローラは、自分に途方もない魔法の才能があるということを、すっかり忘却^{ばつかきやく}していた。

そして、その才能を学園側が放つておくはずがないと、思い至ることができなかつた。

冒險者は誰だれでもなれる。

貴族でも。平民でも。無む一文いちもんでも。文字の読み書きができないくとも。

必要なのはたった一つ。

命を懸ける覚悟かくごだ。

人に害をなすモンスターの駆除。

古代文明の遺跡の探索。

過酷な自然の奥地から鍊金術れんきんじゅつの材料を持ち帰る。

これら全て、人類に貢献する重大な仕事であり、そして死と隣り合わせの——冒險クエストだ。

冒險者は死ぬ。

特に武術や魔法の訓練もろくにせず、手取り早く金を稼こうごうと冒險者になつた者は、おおむね死ぬ。

新人冒險者の一年後の生存率が七割を切る、という具体的なデータがあるほどだ。

それでも冒險者になりたがる者はあとを断たない。

なにせ金になる。スリルがある。子供あこがの憧あこがれである。

そして、死ぬのだ。

冒險者とはそういうものだと、ずっと思われてきた。

だが、五十年前。そこに異いを唱えた者がいた。

死んだ者たちの中には、もしかしたら才能あふれる者がいたかもしれないのに。

その才能を伸ばす前に死んでいいはずがない。

ならば死ぬ前に教育してやろう。

そう唱えたのは『麗しき大賢者うるわ』の二つ名を持つ、Sランクの冒險者。

百三十年前に魔神の一体を倒し、今なお存命の生きた伝説、カルロッテ・ギルドレア。

彼女は当時の国王に掛け合つて資金を出させ、教師に相応ふさわしい人材を集め、そして冒險者を育てる学校を作り上げた。

それが、王立ギルドレア冒險者学園。

ローラが今日から通うことになる学校であり、父ブルーノと母ドーラもこの戦士学科の卒業生だった。

王立ギルドレア冒險者学園には二つの学科がある。

戦士学科と魔法学科だ。

前者は剣、槍やり、斧、弓、徒手空拳としゅくうけんなどをメインに教える。

後者は魔法全般だ。

そして無論、ローラが入学するのは戦士学科である。

「戦士学科の新入生はこっちに集まれ！」

広い校庭に男性教師の野太い声が響いた。

どこに行けばいいのか分からず、荷物を持ったままオロオロしていたローラは、ホツとため息を吐く。

いくら剣の才能があつても、九歳は九歳だ。

見知らぬ王都。慣れない集団行動はどうしても緊張する。

「ローラ・エドモンズ。戦士学科です！」

「おお、お前があのエドモンズ家の娘か。確かまだ九歳だったな。その歳で入学試験を突破するとは、両親に負けない才能だ。しかし、ここでの授業は厳しいぞ。覚悟しておけ」

「はい！」

厳しいのは望むところだ。

ローラは強くなりたいのだから。

それにもしても、九歳で入学というのは本当に異例のことらしい。

周りを見回しても、年齢の近い者が見当たらない。

入学試験は皆が別々に受けたから分からなかつたが、一番若くても十二か十三歳くらい。二十歳近いと思われる者もいる。

もつとも、入つてしまえば年齢など関係ない。全ては実力で決まる。

とはいえ、友達にするなら、年齢が近いほうが話しやすい。

近い

自分はちゃんと友達を作れるのかなあ、と、ローラは不安になつてきました。

しかし大丈夫だろう。
歳が離れていても、ここにいる者は全員、一流の戦士を目指している。

きつと話が弾む。

更に剣士同士なら親友になれる、はず。

「戦士学科の新入生、四十三人。全員集まつたようだな。では今から、この装置でお前たちの才能を測る。無論、こんな道具で測定した才能など目安に過ぎないが、一応、今後の授業の参考にするま、気楽にしてくれ。これで今すぐどうこうするつもりはないから」
そう語る大柄な教師の横には、青い半透明の柱が立っていた。

太さも長さも、その教師と同じくらい。

名前を呼ばれた生徒は、その柱に手を触れる。

すると柱から光が伸びて、空中に文字を描き始めた。

どうやら、剣や槍、各種魔法の適性を数値化してくれる装置のようだ。
おそらく、魔法技術の塊なのだろう。

創立者のカルロッテ・ギルドレアが作ったのだろうか？

「次。アンナ・アーネット」

「はい」

返事をして前に出たのは、十三歳くらいの少女。髪は燃えるような赤色だった。

多分、彼女がローラに一番歳が近い。

そのアンナの歩き方を見て、ローラは思わず唸うなつてしまつた。

まだ若い……というか幼いのに、一流の戦士のような雰囲氣ふんいきだつたのだ。

父と母という本物の一流を日常的に見てきたからこそ分かる、ローラの勘だ。

そして勘が正しいと装置が証明してくれる。

名前…アンナ・アーネット

剣の適性…98

槍の適性…81

斧の適性…66

弓の適性…70

格闘適性…83

空中に表示された数値を見て、教師が「ほう」と声を漏もらす。

「さつきから見ていて分かつたと思うが、あの厳しい試験に合格した者でも、適性はおおむね50~60だ。しかしアンナは一番低い斧でも66。剣に到つては98だ。間違いなく天才。もつとも、どんな

天才でも慢心したらそこで終わりだがな」

「慢心なんてしない……全力で研鑽けんざんを積む」

教師に対してアンナは鋭い声で答える。

それを聞いて、ローラは武者震むしゃぶるいした。

きっと彼女は自分のライバルになる。そんな予感がしたのだ。

「さて。アンナの魔法適性がまだ残つてるぞ。戦士学科の者でも、魔法を使えて損はない。覚える余裕があるならドンドン覚えろ」

攻撃魔法適性…04

防御魔法適性…29

回復魔法適性…08

強化魔法適性…31

召喚魔法適性…06

特殊魔法適性…10

「ほう。こりやバランスがいい。防御魔法で自分をガード。強化魔法で身体能力の強化が可能だ。

根からの白兵戦スタイルだな、アンナは」

「……好みと適性が一致して一安心」

そう呟いたアンナは、本当に嬉しそうに微笑んでいた。

戦士学科なのに魔法適性を見られる。教師も魔法の使用を推奨している。

ローラはそこに違和感を覚えたが、両親から受けた教育が極端なものだったという自覚もあるので、顔にも出さず大人しくすることにした。

「よし。次はローラ・エドモンズ。どんな数値が出るか、楽しみだな」

ローラの小さな姿に生徒たちは不思議そうな顔をし、次にエドモンズという姓を聞いて「おお」と歓声を上げる。

「エドモンズってあのエドモンズか？ 魔法嫌いで、接近戦マニアで……そこまで偏つてゐるのに鬼のように強かつたっていう夫婦」

「一人娘がいるって聞いたことがあるし、確かあのくらいの年齢のはずだ。まさか同じ年に入学することになるとはな……」

「それにしてもまだ十歳にもなってないだろ。コネか？」

「バカ。大賢者の学園がコネの入学なんか認めるかよ。実力だよ実力」

戦士学科の新入生全員の視線がローラに集中する。

人生のうち、これほど注目を受けたことがなかつたローラは赤面し、小走りで装置の前に行く。そして――。

名前…ローラ・エドモンズ

剣の適性…107

槍の適性…99

斧の適性…74
弓の適性…68
格闘適性…75

ローラの数値に、皆が啞然とする。

教師ですらボカンと口を開け、それから苦笑いのような顔になつた。

「剣の適性100超えとは……恐れ入つた。もしかしたら学園創立以来じやないのか？」

測定した数値など目安に過ぎない。

天才でも慢心したらそこで終わり。

そう言つていた教師だが、ローラの数値を見て目を輝かせていた。

ローラもまた、鼻が高かつた。

別にひけらかすつもりはないが、それでも自分に剣の才能があると、こうして数字で示されて嬉しいはずがない。

アンナより高いというのも安心に繋がつた。

何だかんだ言つて、アンナより剣の適性が低かつたらどうしようか不安だつたのだ。

そのアンナは、ローラを睨んでいた。

向こうもこちらを意識しているらしい。

やはりライバルだ。

数値の差は9。おそらく、努力次第で覆る。

「さて。次は魔法の適性だ」

それは興味がない。

むしろ見たくない。

そこそこ高い数値が出るのだろう。

練習せずに魔法が使えたのだから。

だがローラは魔法を使うつもりなど微塵みじんもなかつた。ゆえに、どんな数値だろうと無視する。

と、決めていたのだが――。

攻撃魔法適性・99999

「ん?」

「は?」

「なっ!」

「故障か?!」

「999つてありえないでしょ?!」

「バカ、桁けたが違う。9999だ!」



まず最初に出てきた攻撃魔法の数値を見て、生徒も教師も奇声を上げた。

桁違い。

今まで表示されてきた数値とは明らかに次元が違う。

100を超えたと大騒ぎしていたところに9999である。

理解が追いついている者など、一人もいなかった。

ローラもまた硬直し、次々と表示される自分の適性を眺めるしかできない。

それは悪夢のような光景だった。

防御魔法適性・9999

回復魔法適性・9999

強化魔法適性・9999

召喚魔法適性・9999

特殊魔法適性・9999

ローラの意識は飛んでいた。

剣士になる。魔法など使わない。

そう理想を燃やしていた九歳の心に、この現実はショックが大きすぎた。

「ローラくん、ローラくん。ちょっとこっちに来てくれるかな！」

そして気が付くと、ローブを着た如何にも魔法使いふうの教師が、ローラに向かって手招きしていた。

「もう話はまとまつたから。君は魔法学科ね。はい、今日からよろしく！　いやあ、想定外の数値だよ。君のような才能を迎えることができて嬉しい。才能だけなら大賢者様すら凌駕りょうがしている。君は魔法の歴史を塗り替えるかもしれない！」

ローラは目の前が真っ白になつた。そして、

「う、うわあああんっ！」

と泣き叫び、バタリと倒れ、完全に気絶してしまった。

※

ローラが目を覚ますと、真っ白な天井てんじょうが視界に飛び込んできた。
ここはどこなのだろう。

少なくとも自分の家にこんな部屋はなかつた。

そういえば馬車に乗つて王都に向かつて、そして冒險者学園の校庭で……。

「あ、ああああっ！」

記憶を取り戻したローラの頭に、四桁の数字がまとわりつくように浮かび上がる。

9999。

夢であつてくれ。間違いであつてくれ。

自分は剣士を夢見る女の子で、魔法などという後方からチマチマ撃つようなものは願い下げなのだ。迫り来る凶暴なモンスターの群れ。そこに仲間たちとともに突っ込んで、渾身の力で斬り伏せる。ああ、素晴らしい。英雄譚の主人公のようだ。

あるいは剣士同士の決闘もいい。刃と刃をぶつけ、火花を散らすのを想像するだけで心が踊る。それが、それが。

「記憶がハッキリしすぎて……私は魔法学科に転籍になつて……それで気絶したんだ……」

誰かが保健室か何かに運んでくれたのだろう。

それにも、どのくらい寝ていたのか。

入学式はどうなったのか。

クラスのみんなと自己紹介したりするはずだ。

父と母から学校の様子を聞かされ、楽しみにしていたのに。

「最悪のスタート……」

ローラは呟いて、ガックリとうなだれる。

そのとき、隣から「うーん」と唸り声が聞こえてきた。

すぐ近くに人がいたのだ。

その気配を今まで感じ取ることができなかつた。

戦士として何たる失態。まだ頭が寝ぼけているらしい。

「それにしても、この人、誰なんだろう？」

女の人が、自分と同じベッドに潜り込んで幸せそうに眠つている。

年齢は二十歳かそこら。

白銀色の髪を伸ばした、とても美しい人だつた。

——白銀？

この学園の創立者にして現役の学長、大賢者カルロツテ・ギルドニアも、髪が白銀色だったはず。だが、大賢者は三百歳になろうという年齢である。

ローラは魔法のことをほとんど知らないが、それで若さを保つていたとしても、二十歳の外見はないだろうと判断した。

もしかしたら、学園の先輩なのかもしれない。

気絶したローラをここまで運んでくれたのが彼女で、そのまま一緒に眠つてしまつた……のだとしたら、随分とノンビリした人だ。

とにかく、起こして事情を聞いてみよう。

万が一、億が一。

9999という数値も魔法学科への転籍も、全ては夢だったというオチもあるかもしれないし。

「あのう……」

今まで故郷の町からほとんど出ることなく過ごしてきたローラにとつて、知らない大人に話しかけるというのは、少々勇気のいる行為だつた。

しかし、黙つて立ち去ろうにも、校舎の構造が分からぬ。二度寝するのはもつてのほかだ。自分がどういう状況に置かれているのか、早く確かめたい。

「ん、ん……」

ローラが肩を揺すると、女性は瞼を開け、ゆっくりと上半身を起こした。

そして、口を大きく開けてアケビ。

美人なのにだらしがない。ローラがこんなはしたない真似まねをしたら、お母さんに怒られる。「おはよう、ローラちゃん。あなたも今起きたところ?」

「は、はい」

こちらの名前を知っている。

やはり学園の関係者なのだろう。もしかしたら教師かもしれない。

何せ、この女性。とぼけた口調なのに、気配が、おかしい。

たるもの
只者ではないと、そう確信できる。

「さて、今は何時かしら」

女性は首から下げる懷中時計を開いて時間を確認した。

それは髪の色と同じ白銀の素晴らしい懐中時計だった。

「もうお昼じゃない。よかつた。見事に入学式をサボれたわ。灯台もと暗し。まさか私がローラちゃん」と寝てるなんて、誰も思わなかつたみたいね。ありがとう。あなたの陰で見つからずにや

り過ぎせたわ」



「はあ……それはどうも」

いまいち要領を得ないが、つまりこの女性は、入学式に出たくなかったからここで寝ていたということらしい。

「あの、あなたは生徒ですか？ それとも先生？」

「うーん……どちらかと言えば先生かしら？ あ、私がここにいたってのは内緒ね。怒られちゃうから」

そう言つて彼女はニッコリ微笑む。

この若さからして、きっと新米の教師なのだろう。

それが入学式をサボつて昼寝をし、全く悪びれる様子もないのだから恐れ入る。

もつとも、ローラも似たような状況なので、とやかく言えないが。

「ところで私はどうしたらいいんでしょうか？ 魔法学科に転籍になつたと言われたところまでは記憶があるんですけど……私は戦士学科に行きたいです！」

「うーん……でも決まつたことだから。魔法だつて悪くないわよ。やってみて、どうしても嫌だつたら、そのときは私に相談してちょうだい」

「……はあ」

新米教師に相談して、どうにかなる問題なのだろうか。

ローラはまだ社会を知らないが、ちょっと無理そうだなあと想像ができた。
直訴するなら大賢者その人だろう。

ああ、そうだ。見つけ出して抗議しよう。

「ま、ここで待つていれば、そのうち魔法学科の先生が迎えに来るわよ。気楽にやりなさい。じゃ、私は見つかる前に逃げるわ」

彼女は白銀の髪をひるがえし、ベッドから飛び出した。

その仕草^{しざ}がとても絵になつていたので、ローラはつい見とれてしまう。

そして、最後にこれだけは聞いておきたかった。

「あの、待つてください！」

「ん、なーに？」

女性は窓に手をかけたまま振り返る。

「……あなた、とても強い、ですよね？ とんでもなく」

認めたくないが、父よりも、母よりも。

「へえ……ローラちゃん、凄いわね。その歳で分かるんだ。^{さすが}流石は魔法適性オール9999。偉い偉い」

女性はわざわざローラのところまで戻ってきて、頭をなでた。

しかし、何が偉いのだろう。

これだけ強者のオーラが漏れていたら、誰だつて分かるはずだ。

「人は大きすぎるものを見ると、それを視界に收めることすらできなくて、『そこにある』と認識できないのよ。ローラちゃんは少なくとも、私の力を視界に收めているのね」

「視界に收めるつて……あなたは大人にしては、むしろ小柄なほうだと思いますが」

「あら。ちつちやいのはローラちゃんも一緒にじゃない」

「む。私はまだまだこれからです！」

失敬な話だ。ローラが小さいのは九歳だからであり、これからいくらでも成長する余地がある。

一方、目の前の女性はもう大人なので、これ以上伸びない。一緒にされては困る。

「ふふ、そうね。ローラちゃんはこれからね。どう成長するのか楽しみ……あなたなら、私の『二つ名』を継げるかも」

「……二つ名？」

ローラは話について行けず、首を傾げる。

そのとき、女性が急にギョツとした顔になり叫び声を上げた。

「あ、エミリアが来たみたい！ 本当に逃げなきや怒られるわ！」

今までのノンビリした雰囲気からは想像もできないほどの速度で駆け出し、彼女は窓から飛び出していった。

茂みか何かに突っ込んだのだろう。

ガサガサと音が聞こえる。

「あ、待ってください、二つ名って何ですか！」

ローラも窓際まで走って外を見回す。

見晴らしのいい校庭が広がっていた。

しかし、出て行つた女性の姿は確認できない。

「……消えちゃった」

この短時間で見えない場所まで走った？

そうだとしたら、加速で爆音が聞こえそうなものだが。

とても静かに彼女は姿をくらました。

ローラが首を傾げていると、ドアがコンコンコーンとノックされる。

「魔法学科の教師、エミリア・アクランドです。ローラ・エドモンズさん、起きてますか？」

「は、はい……！」

迎えに来た教師も若い女性だった。
眼鏡をかけた、青い髪の人。

ギルドレア冒険者学園の教師をしているのだから、優秀なのは間違いない。

事実、いくつか修羅場をくぐつたような目をしている。

なのに、さつきの女性が放っていた得体の知れないオーラは、微塵も感じられなかつた。

※

ローラはエミリア・アクランドに連れられて、魔法学科一年の教室に連れて行かれる最中だ。
今年の入学生は、戦士学科が四十三人。魔法学科が三十九人。
それがローラが転籍になつたおかげで、四十二人と四十人に変わつた。

いざれにせよ一クラス分であり、それは例年と同じらしい。

エミリアいわく、ローラが気絶していた午前中の間に、入学式に校舎の案内、あと自己紹介も終わってしまったという。

そして昼休みも過ぎ去り、今から午後の授業が始まる。
昼食を抜くハメになつたのは辛いが、その分、晩に多く食べよう。学園の食堂は無料だつたはずだし。

「午後は訓練場に行つて皆の実力を見る予定なんだけど、その前に教室で、ローラさんの自己紹介をしてもらうわね」

「はい。ところで……やつぱり私、ずっと魔法学科なんですか？」

「そうよ。嫌かしら？」

嫌だ——と、ローラは断言してやろうとした。

当たり前だ。

戦士学科に願書を出し、試験を受けて合格したのだ。

それが入学式の当日になつて、いきなり魔法学科に転籍なんて嫌に決まつている。

だが、さつき保健室で言われた言葉が妙に引っかかる。

魔法だつて悪くない。

彼女はそう言つていた。

他の誰かの言葉なら即座に忘れてしまいそうな陳腐なもの。だがローラは、あんなに得体の知れ

ない人物と出会つたのは初めてだつた。

しかし父と母は、ローラが戦士学科に入ると思い込んで学費を払つたはずだ。

それなのに魔法学科に入つたら、詐欺ではないだろうか。

「あの、お父さんとお母さんは許してくれるでしようか？ 入学費とか授業料とか、揉めるんじゃ……？」

「それは大丈夫よ。だつてこの学園。国家予算だけで運営してるから。つまり無料。あなたの両親は入学費も授業料も払つていないのでよ」

「え、そうだつたんですか？」

「そして学園の理念は、若者の才能を伸ばすこと。この一点。つまり、あなたに魔法の教育をしないということは、学園の理念に反するわ。学園側の判断で学科を転籍させるというのは前にもあつたことだし、契約書にも書いてあるの。あなたは読んでいないと思うけど」

九歳のローラが契約書など読んでいるわけがない。そもそも存在を知らなかつた。

もつとも、契約書を熟読していたとしても、ローラが魔法学科に転籍になるなど、想像もしてなかつただろうが。

「……私がもし、どうしても魔法学科が嫌だと言つたらどうなります？」

「難しいわね……あなたがもつと普通の生徒だつたら、希望が通つていたかもしないわ。けど、あなたの魔法の適性はオール9999。観測史上最高。今この学園は、あなたに注目してるのよ。

どうやつてその才能を伸ばしていくか、教師全員が考えている。私を含めて。ねえ、お願ひだから私たちを信じて、魔法学科で授業を受けてみて。魔法だって楽しいわよ？ 実際にやつて、それでもどうしても嫌だったら、そのときにもう一度相談しましよう。だから、ね」

保健室の女性と似たようなことをエミリアは言う。

なるほど、楽しいのかもしれない。

そこは否定しない。

しかし、一番楽しいのは剣だ。

ローラは九年しか生きていながら、そのくらいは知っている。

いや、知った気になつていいだけ？

そんなわけはない。と思いつつ。

実は魔法を使つてみたら、案外、気に入つてしまつたりして？

いいだろう。そこまで言うなら、付き合つてやろうじゃないか。

「……分かりました。ひとまず、です。ひとまずは魔法学科に入ります」

「ありがとうございます！ 今日からよろしくお願いね」

「……はい。よろしくお願ひします」

そしてローラは、魔法学科の教室に入った。

自分がここに馴染むわけはないと、このときは決めつけていた。

※

「……ローラ・エドモンズ。九歳。特技は父に教わった剣です。槍も少しだけ母に教わりました。好きな食べ物はオムレツです」

魔法学科の新入生、三十九人。

その前に立ち自己紹介したローラはガチガチに緊張していた。

これが戦士学科ならまだマシだったのだろうが、ここは魔法学科。気分的には完全にアウェイ。魔法使いの卵たちを前に、特技は剣と言い切るのは実に勇気がいる。

しかし事実だから仕方がない。

そして魔法のことは分からぬ。

過去に二度使用しただけだ。

あの変な装置は9999とふざけた数値を^{はじ}弾き出していたが、ローラの知つたことではない。

「あれが9999の子か……」

「あんな小さいのに、本当に凄いのか？」

「すぐに分かるさ。それに才能だけじゃ強くなれない」

「つっても9999だしなあ」

あちこちからヒソヒソと声が聞こえる。
晒し者になつた気分だ。

何とかして戦士学科に逃げ込めないものか。

「はい、皆。ローラさんの自己紹介が終わつたところで、訓練場に移動するわよ。先生についてきて新入生三十九人。そこにローラを加えて丁度四十人が、廊下を一列になつて、ゾロゾロと歩く。訓練場は校舎の外にあつた。

レンガの壁に囲まれており、生徒四十人と教師一人が入つても、窮屈には感じない。天井はなく、青空がそのまま見える。

しかしローラは違和感を覚えた。

「……魔力で囲まれている?」

今までローラは、過去自分で使用した二回以外、魔法に触れたことがない。しかし不思議と、この訓練場が魔力で作られた壁で覆われていることが分かつてしまつた。

「流石はローラさん。そのとおり。この訓練場はつねに防御結界でドーム状に覆われています。だから中で大爆発を起こしたりしても、周りに被害が及んだりしないから安心してね」エミリアがそう語ると、生徒たちから「おお」と歓声が上がつた。

防御結界とはそんなに凄いものなのだろうか、とローラは首を傾げる。

しかし、どうやら凄いのは防御結界ではなく、見破つたローラだつたらしい。

「すげー! 一目見ただけで感じ取るなんて、どんな才能だよ」

「俺、全然分かんなかつた」

「わ、私は少し違和感あつたし! 時間をかければ防御結界だつて見破れだし!」

「そりや時間かけりや俺だつて……」

騒がしい。

というより照れくさい。

全員が年上なのに、尊敬の眼差しを向けてくる。

これが剣技なら、今までの努力を認められたのだと誇らしい気持ちにもなれるが、今はなぜ褒められているのかすら分からぬ。

「はい、私語はそこまで。今日は皆の現時点での実力が見たいから。一人ずつ、的に向かって攻撃魔法を撃つてみて。炎でも雷でも何でもいいから。いい? 当てるのが課題。威力は無視していいから。じゃ、やりたい人から名前を名乗つて順番にどうぞ」

エミリアはそう言つてから、パチンと指を鳴らした。

すると訓練場の奥に魔法陣^{まほうじん}が広がつた。

何かが出てくる——とローラが予感した瞬間、魔法陣から炎が飛び出した。

その炎はうねり、人の形を作り、成人男性ほどの大きさとなつた。

「おお……精霊の召喚だ……」

「先生、あんな若いのに……やっぱギルドレア冒險者学園の教師つて凄いんだなあ」

「どうやらこれは凄い技のようだ。だが、魔法の知識が皆無のローラには、全く伝わらない。

「あのう……精霊の召喚つて何ですか?」

ローラは隣に立っていた少女に恐る恐る尋ねてみた。

彼女の年齢は十四歳くらい。この中では比較的若い。

金色の髪をグルグルと螺旋状にセットしていて、なにやら勝ち気な顔立ちをしている。

全員が規定の制服を着ているのに、彼女のだけ、なぜかフリルやレースが多い。

どうやら入学前に改造を済ませてきただらしい。

口者じゃない。

それでも歳の離れた者や、異性に話しかけるよりはまだ気楽だった。

「あらまあ。ローラさん、あなたの凄い魔法適性を持っているのに、そんなことも知りませんの？」

「はい……その、私、本当は剣士志望で……魔法の勉強なんてしたことなかったから……」

ローラが正直に言うと、金髪の少女はムッとした顔になった。

まあ、気持ちちは分かる。

ここにいる者は全員、一流の魔法使いを目指して来たはず。

そこに魔法に興味のない人間が混じっているのが許せないのだろう。

しかし、他にどう説明しろと言うのか。

ローラだつてこんなことになるとは思つていなかつた。

今朝までは期待で胸を膨らませていたのだ。

今は『やる気』の『や』の字もない。

「あら、そう！ けれど勉強も練習もせず、才能だけでトップになれると思わないことね！ 一年

生のナンバーワンは……いえ、学園最強の魔法使いはこのシャーロット・ガザードですわ！」

「シャーロットさん、ですか。あの、気を悪くしたならごめんなさい。私はナンバーワンになれる

とは思つていないので……どうぞご自由に」

「……ふん。張り合いがないですね。ライバル意識を燃やして損してしまいましたわ」

シャーロットはローラに対する興味を失つたらしく、そっぽを向いた。

代わりに、別の男子生徒が親切に『精霊の召喚』の解説をしてくれた。

いわく、この世界には精霊という存在が充満しているらしい。

水も炎も雷も土も。光も闇も。ありとあらゆるものに精霊が宿っていて、その精霊に語りかけ、
己の魔力を差し出すことにより奇跡を引き起こす。

それすなわち魔法。

そして高位の魔法使いは、精霊そのものを召喚し、自分の魔力を使つて具現化し、使役すること
ができる。

今、エミリアがやつてみせたように。

「なるほど……召使いの凄いバージョンですね」

「まあ、そういう解釈もありかな？」

教えてくれた男子生徒は微妙な顔をする。

どうもローラの解釈がお気に召さなかつたようだ。

「私が召喚した炎の精霊が的よ。さつき威力は無視していいと言つたけど、思いつきりやつて壊し

てもいいから。あと二十体は召喚できるわ」

「二十体、ですか……まあ、教師ならそのくらいできて当然ですわね」

そう言いながら、シャーロットは声を震わせていた。

きつと炎の精霊を二十体召喚するというのは凄いことで、シャーロットにはそれができない。だから悔しいのだろう。

と、予想は付くのだが、入学初日のくせに教師に負けて悔しがるとは、なかなか凄い神経をしている。

ローラはシャーロットに対し『変な人』と思つてしまつた。

ところが、だ。

ふと自分に置き換えると、痛いほど気持ちが分かつた。

予定通り戦士学科に入り、そこで教師に自分を遥かに超える剣技を見せつけられたりしたら。悔しくて、その日は眠れないかもしない。

(何だか急に、シャーロットさんの方が好きになつてきた……！)

魔法学科に期待なんて一つもしていなかつたが、彼女とは友達になれるかもしれない。

そう思つてニコニコしながらシャーロットを見つめてみた。

そして目が合う。

「……ふん！」

逸らされてしまつた。



ローラは悲しくなり、肩を落とす。

※

「よし、一番手は僕が行くよ。命中率には自信があるんだ」

シャーロットよりも年上の男子が前に出て、そして手の平に魔力を集中させた。

放ったのは、水で作られた矢。

それは一直線に飛び、五十歩ほど先にいる精霊へ見事に命中する。が、精霊の持つ熱量であつと
いう間に蒸発し、ダメージを与えることはできなかつた。

「いい感じね。命中判定よ。じゃ、次の人」

二人目はエミリアとさほど変わらない歳の女性だつた。

さぞ経験を積んでいるのだろうと思いきや、彼女は外してしまつた。

三人目も失敗だ。

魔法を命中させるのは意外と難しいようだ。

「では、そろそろ、わたくしがお手本を見せて差し上げますわ」

四人目はシャーロット。

全身から自信がみなぎつてゐる。

「おお、ついに出たぞ、ガザード家の長女」

「攻撃魔法適性120だからな……きっとすぐ一のを撃つてくるぞ」

「9999のせいで霞んでるけど、120も十分天才だしな」

「十分つてか、数十年に一人の逸材のはずだぞ……9999のせいでアレだけど」

あまり9999を連呼しないで欲しいと思うローラであつた。

「光よ。我が魔力を捧げる。ゆえに契約。敵を粉碎せよ——」

シャーロットは言葉を紡いだ。

流石にローラも知つてゐる。

これは呪文という奴だ。

魔法使いが魔法のイメージをよりハッキリさせるために唱える言葉。

普通なら、喋りながら何かをすると気が散るようにも思える。

しかし優れた魔法使いは呪文を詠唱することにより、自らの精神を改変し、魔法の効果を高める
らしい。

そう母に教わつた。

横で聞いていた父は、魔法使いらしい小細工だと切り捨てていた。

だが、目の前で呪文詠唱し、魔力を高めているシャーロットの姿は……端的に言って、格好良
かつた。

美しかつた。凜々しかつた。見惚れてしまつた。

剣術こそ至高と信じてきたローラが、よりもよつて魔法使いの少女に目を奪われた。

そして、シャーロットの手の平から閃光が走った。

白く輝く光の砲撃だ。

今までの生徒とは明確にレベルの違う威力。

それは空間そのものを切り裂くように炎の精靈へ直撃し、貫通した。

精靈を構成した炎が散る。そのまま消える。

更に光の砲撃は、精靈の後ろの壁に衝突し轟音を響かせた。

「はい、お見事、シャーロットさん。まさか入学初日の生徒に、炎の精靈を倒されるとは思ってなかつたわ」

「ふふ。このくらい、ガザード家として当然ですか」

そう言つてシャーロットは金色の髪を手でかきあげた。

平静を装いたいのだろうが、先生に褒められたのが嬉しかったようで、頬が紅潮している。

かなり分かりやすい性格なのかもしれない。

「そして皆。この訓練場の強さも分かったでしよう？　あれほどの威力の魔法でも、ほら。壁に焦げ目すらついていない。それは空に向かつて撃つても同じこと。外に迷惑はかからない。だから皆、安心してぶつ放してね」

エミリアは新しい炎の精靈を召喚した。

それから五人目、六人目と生徒たちが挑戦していく。

その様子をローラはずつと後ろから見ていたが、命中させることができる生徒は、全体の七割く

らいだ。

精靈を破壊できた生徒といえば、それはシャーロット唯一人。

少し……いや、かなりがっかりだ。

シャーロットの魔法で期待してしまった分、そのあと生徒たちの不甲斐なさに腹が立つ。

なんだ、この人たちは。

命中させるだけで限界か。

これが剣なら、何の訓練もしていない者でも当てることができるぞ。

やはり魔法は駄目だ。剣のほうが素晴らしい、と思わずにはいられない。

「残っているのはローラさんだけね。さ、さ、さ。思いつきりやつてちょうどいい」

「ふふん。お手並み拝見ですわ」

エミリアとシャーロットが、期待を隠さずともせずローラを見つめた。

また、他の生徒たちも似たようなもので、適性値9999がどんな魔法を出すのかと注目していく。（うわあ……緊張するなあ。けど、これで本気でやつてショボイ魔法しか出なかつたら、それを理由に戦士学科に入ってくれるかも！）

「で、ではローラ・エドモンズ、行きます！」
全員の視線を浴びながら、一歩前へ。
手の平を炎の精靈に向け、意識を集中。

呪文を唱えよう。

理屈は知らないし、技術もないし、鍛錬も積んでいない。

だが今日見た中では、シャーロットのやり方が最もしつくり来た。

真似をさせていただく。

「光よ——」

このあとに続く言葉は『我が魔力を捧げる。ゆえに契約。敵を粉碎せよ』だつた。

しかし頭の中で唱えてみても、いまいち違うような気がする。

ゆえに自分流にアレンジだ。

「我が魔力を喰らえ。集え、従え、平伏せよ。そして命じる。万象を蹂躪せよ。王が誰かを知るがいい——」

はて？

自然とスラスラ呪文が口から出でてきたが、やたらと仰々しい。そして威圧的だ。

こんな上から目線で精霊が言うことを聞いてくれるのだろうか。

ローラがそう疑問に思つていると。

「あ、ちょつ、ローラさん！ ストップ！」

「へ？」

エミリアが止めたときにはすでに遅かつた。

ローラの手の平から光の砲弾が……否。光の破城槌ぱくじょうづいが放たれたあとだつた。

訓練場の全てが光に包まれる。

明るすぎて目を開けているのが困難だ。

顔面を熱波ねつぱが叩たたく。

やがてローラが放つた破城槌は炎の精霊に衝突し、一瞬で消滅させ、そのまま訓練場を包む防御結界へ突っ込んだ。

地震が起きた。

大気も震えている。

そして、空がひび割れた。

「あああ！ ああああつ！ 防御結界、修復、強化！ 新結界構築、生徒を守護せよ、強化、強化、強化アアツ！」

エミリアは悲鳴を上げて、色々と魔法を使つていて。

ローラは見ているだけで、その全てが手に取るように分かつた。

まず、訓練場の結界の修復と一時的な強化で、破城槌の爆発が外に漏れないようにしたようだ。

それから、ここにいる生徒全員とエミリア自身を包み込む新しい結界を作り、あらん限りの魔力で強化。ひたすら強化。

が、間に合わない。おそらくエミリアの作った結界には穴が空き、生徒に少なからず被害が出るだろう。

ならば元凶であるローラが新結界を更に強化してやればいいだけの話。

「……強化」

小さく咳き、エミリアの結界に自分の魔力を上乗せする。

他人の魔法に割り込むというのが、どれほど高等テクニックかまるで自覚しないままローラは平原とやってのける。

そのおかげで全員が無傷だった。

被害も外に広がらなかつた。

だが、焦げないはずの壁が真っ黒になつてゐる。

エミリアの判断とローラの強化が一瞬遅れていたら……どうなつていていたことやら。「え、マジで……え、ローラさん、もう既に私より強い？ ギルドニア冒險者学園の教師にしてAランク冒險者、そして『竜殺し』の異名を大賢者様から与えられた私より……え、え？ そんな、流石にそれは……ない！」

エミリアは何やらブツブツ言つてから、自分の頬をパンッと叩いた。

そうやつて動いたのは彼女だけで、他の全員はボカンと突つ立つていた。

そして当のローラは、自分の手の平を見ながら——興奮していた。

「あの光を、あの威力を……私の力で……？」

父と母に知られたら怒られるだろう。

しかし、味わつてしまつたのだ。

魔力を鍊つて、思いきり放つ。

剣では味わえない、特上の破壊力。

これは、病みつきになつてしまふ。

(いや、駄目よ！ 私はローラ・エドモンズ。剣士を夢見る少女なんだから！)